白純大和尚さま

――思い出を語る――

ナリス化粧品　東郷　敏

いまさらながら、白純大々和尚さまの御偉業、御遺徳を偲んでおります。私は大圓御和尚さまをして、三十年も前にはじめて御目にかかりました。

総持寺や永平寺で御坊さんの恐しさは身にしみておりましたから、黒田先生の御父さんだから、とても偉いし、コワイのだと、観念的に思い込んでおりました。白純大々和尚さまは、型破りのジョークとユーモアを混じえながら、アッという間に、私に慈父の想いを抱かせ「仕様もない武志を東郷先生よろしく頼みます。親、子共に貧乏です。」と、とても信じられない様な低く、やさしいおことばから、あの偉大な子づくり人づくり、寺づくりの名人のかけらが少しも感じられないあの素晴しい溢れる御人柄は、忘れることが出来ません。

それから、間もなく、開基と伊藤喜三郎先生の御媒酌で黒田先生と、倫子さまの御結婚式が岩本猊下式師により、駒込の名刹吉祥寺でとり行われ、披露の宴が品川迎賓館でとり行われま

東郷　敏 氏

した。この宴の歴史的大事業の進行と司会を黒田先生の命により私がさせていただきました。

永平寺、総持寺の管長さまは勿論のこと、日本仏教会の元帥と大将クラスの方々ばかり、たくさんのご臨席があり、黒田家と加藤家の御立派な御家柄と佛教界における大きな存在感をはじめて知って、ふるえて驚くには、あまりにも、遅すぎた、自分を忘れることが出来ません。

時に、白純大々和尚さまの、御挨拶に、六波羅蜜の行に燃えた当時のご自分の生い立ちと青春を、鼻をすすり、涙ながら、諄々と語り尽してくださいました。まことに、慈父の輝ける御姿。

精一杯の母が、自分の着物を解き、色抜きして、躰の弱かった自分に、充分入れる綿にも事欠き、貧乏の中でワタ入れでなく、ワラ（藁）入れの丹前を届けてくださったわが母の犠牲と、思いとそのぬくもりで、乗り越えた苦しい修行の時代。今日あるは、親の御蔭。ご苦労の中でまたご自分も七名の子を育て、人を育て、寺を育て、自らに行を尽し、唯々精一杯救済事業と孝を尽しながら、国づくりの遠大な理念と理想を御話しくださったこと、いつまでも鮮明に忘れることが出来ません。いままた、子を想い、わが父母に遠く思いを致し、切々と述べられる大々和尚さま、そのときの感動は、表現できません。

そして申されるには、御臨席の皆様方に伏して。敢えて。述べて。尽して。御礼を申し上げます。この武志、私に似て求めての苦労人、とても、僧侶になるとは、親の目からは見えなかったが、到頭、横浜に善光寺を興してしまいました。この伜武志は私のタマシイを開いてくれました。五男坊で、御難続きではありますが『どうぞ、せがれ武志と倫子さんをコレカラモよろしく』と絶句されたことを、忘れることが出来ません。

やっぱり、大圓和尚さまは、お父さんの御意志を見事に継いでしまわれた様です。

私も、わが子十二歳にして失いました。どん底でした。その時、黒田先生が白純大々和尚ご夫妻さまと、大阪の私のあばら家に御尋ねくださいました。私の手をにぎり、東郷さん、辛いことです。負けてはなりません。子供さんはキット、御ほとけさまに救われて、召されて逝かれたのです。会者定離、どうぞ負けないで、がんばってください。

この輝ける力強いおことば、この説得力、まさしく体験者のみが伝えられる御ほとけさまの声。まさに『同事』。アッという間に私共をどん底から、救い上げ、とらわれの心から解き放ってくださった、白純大々和尚さま。この子は余名三ケ月といわれた命を、善光寺の延命地蔵尊に守られて、七年もの命をいただきました。

この力こそ白純大々和尚さまをして、大圓和尚に引き継がれ、遠大な理念のもとに、さらに青少年の教化、檀家への誠心誠意の布教活動、世界への留学制度等数えきれず、ご開山白純大々和尚さまをして、善光寺のさらなる世界への力。いつでも『人のマネをせず、人にマネされない創造と救済の善光寺。未来永遠唯々洋々と発展ばかりです。

あ・り・が・と・うございます。　合掌